小田原史談

第116号
発行所　小田原史談会
小田原市南町2-3-21

所感

会長　中野敬次郎

小田原史談会が発足したのは昭和三十年の春だったから来年は三十周年の記念の年である。

「十年一昔」というがそれを三つも重ねたのだから今日までよくやってきたものだと思う。

小田原市の文化祭が発足したのが昭和二十八年だから、それから二年後のことで、当時戦後の文化的世情が高揚して諸文化団体が続々結成された時期で、我等の小田原史談もこの気運の中から誕生した。だのでみんな熱情があったし張り切っていた。よく論争をし喧嘩もして会員の出入もあったが、それもみな熱心のあまりのことで、追憶すればなつかしさがこみ上げる。その熱情が生んだのが史跡めぐり、会報の発行で、史跡めぐりの第一回は昭和三十四年で、その第一回のとき出発の朝早く小田原駅前広場で百数十人の参加者を前において、会長であった小田原市長の鈴木十郎氏が大声で激励演説をやられたのも思出である。

当時の史跡めぐり、文化探訪は年に一回だけであったのがすぐ春秋となり、今では日がえり、一泊、二泊とあわせて年五、六回も催すようになった。私が直接指導に当った史談会史跡めぐりでもすでに百回を越えてしまった。

会誌「小田原史談」も第五十号までをまとめた総括編第巻を昭和四十年に、次の百号までをまとめた第二巻を昭和五十六年にだしたぢきに百五十号までの第三巻を出さなければならなくなる。講演会も年三回はやらねばならなくなった。何等かの形で来年の記念事業も考えなくてはならないだろう。

しかし、三十年も続けば中だるみというものはくるのだろうか、他の文化団体についても感ぜられることであるが、ここにきて少しマンネリズムになりすぎた会全体に活気が感ぜられなくなった。

昭和五十九年というと五十年代の最後の年だ。干支の方で言うと甲子の年である。十干十二支の組合せは六十年に一回まわってくるが、その組合せの甲子は一番最初のものなので、この年には革新の年であるといわれている。

最後の年で、最初の年だから今年あたり大いに活を入れて新風の吹き起きるような会にしたいものだ。皆んなで大いにがんばろうではないか。

中野敬次郎 執筆
後北条氏秘話 (20)
北条文化小田原から江戸に移る（下）

香川　政治　載録

(五)小田原人吉原遊廓を興す

吉原は江戸歓楽街の中心であるが、旧吉原と新吉原とある。旧吉原は「大日本地名辞典」によって位置を見ると、同書の日本橋区「葭原（よしはら）」の条に

「和泉町、高砂町、住吉町、浪花町、方二町の間、昔吉原花街の旧地なり、今も大門通りと称する古名あるに徴しても知らるべきも也」

とあって、江戸期前半は明暦三年（一六五七）までこの地、即ち日本橋の東方にあったのである。この花街を開設した庄司甚右衛門は相州小田原の人であった

この人の伝記は「洞房語園」に詳しいが、要するに父も小田原の人で、今の小田原市内の代官町というところに「甚内屋敷」と伝えるところがあるのは、彼の住んでいたところであったという。

戦国末期、他にくらべて平和だった小田原は、諸国から歌（芸）妓、舞女などが多く集まり、風紀が乱れたので北条氏は甚内に命じて取り締まりをさせた。これが甚右衛門の父であるから、庄司家は城下の民衆の顔役で、相当の力を持っていた者であったらしい。

子息の甚右衛門の時、北条氏が滅亡したので一族をともなって江戸に移った。

この頃の江戸は新都市建設にわき諸国より人々が集まって、大発展を続けていた。だが流入人口は圧倒的に男が多くこれに応じて新歓楽街の必要を感じ、それを経営しようと考えたのは彼の卓見で、官に請うてそれを成功させたのである。場所は日本橋の東方で、後の新和泉町、高砂町、住吉町、浪花町に跨る方二町の区域であった。茅や葦がはえ沼地がところどころに交る荒地であったのを、慶長七年（一六〇二）に甚右衛門が幕府に訴願してこの地を賜り、当時茅屋町（かやまち）と称せられていた周辺の沼地を埋め立てして、諸方の遊女屋をここに集めて元和三年（一六一七）に一大花街が完成した。そしてこの傾城町を初め葭原（よしはら）といい、ついで吉原に改めたのである。「砂子」という書物に「御府内には昔は定まりたる遊女町なし、慶長十年（七年の誤りか）の頃、小田原の庄司甚右ェ門御願申上げ、元和三年傾城町一箇所に被仰付、堺町の辺に二町四方の土地を被下此処は葭茅の沼なれば、葭原とあるべきを、吉に書き替えたり。五町全く建揃いたるは、寛永三年とぞ」とある。

吉原は、柳町、鎌倉河岸麹町、京橋炭町などに散在していた娼家をここ一ヵ所に集中したもので、更に京都、駿府、小田原からも多数の娼家を集めたという。

庄司甚右ェ門は正保元年（一六四四）甲申十一月十八日、六十九歳をもって江戸に没したが、墓は深川霊岸町の竜徳山光厳寺またの名を霊光院と呼ぶ寺の子院の一言院境内にある。

甚右衛門の墓が深川にあるのは意外であるが、この寺はもと日本橋馬喰町にあって、甚右衛門はここに葬られたが、明暦の大火に寺が全焼して神田岩井町に移

転、更に天和二年（一六八二）に深川の今の地に移ったとき、一緒に移転したものである。

さて、甚右衛門が創立した日本橋の吉原遊廓も明暦三年（一六五七）の大火に焼け、市街整備の目的で浅草に移転することになった日本堤の内の田間に開いた一廓で、これが新吉原である。

甚右衛門の開いた日本橋の旧吉原は、大火後新和泉町、高砂町、住吉町、浪花町の四つの町となったが、その新四町が成立するまでは、旧吉原の跡で、彼の住んでいたところを、しばらくは甚右ヱ門町と言っていたということであるし、新吉原町になってからでも、彼のことを「おやじ」と言って、各娼家では神棚に祀ったという。吉原開創者としての甚右衛門に対する一部の人々の崇敬は、大したものであった。

何れにしても、庄司甚右衛門による吉原開発の事業は、江戸文化発展史上のエポックとして、諸書に様々に伝えられているが、一例を挙げると、「武江年表」の中には、彼が小田原城下から江戸に移住した年も文禄元年壬辰（一五九二）と明記し「吉原傾城町の開発人庄司甚右ヱ門は北条家に仕へし者の子なり。父果て年十五歳にてありしが、家来の介抱にて江戸へ下り、所縁のものにちなみて居住しけるが、成長の後傾城町開基の事をはかり、官許を得て廓をひらけり」

と言っている。そうすると慶長七年（一六〇二）に甚右ヱ門が吉原を開創したのは二十五歳の時となるわけで、如何にも年が若すぎるようにも思える。このほか甚右衛門の生涯には話題が多い。小田原での彼の家の身分も賤民の頭といい、武家であったともいう。

(六)北条家の文化人江戸に移る

江戸時代に眼薬として有名だった増田家の五霊香は外郎家の透頂香（とうちんこう）こと「ういらう薬」ともに、北条時代、小田原の名薬であった。外郎家は徳川期になっても箱根八里越えを背景とした道中薬で売っていたから、そのまま小田原に住んで、今日に至っているが、増田家は北条家滅亡とともにいち早く江戸に移った。これも文禄元年（一五九二）のことと言う。「武江年表」に

「小田原の豪家増田太郎右衛門友嘉が、明人に五霊香という眼薬の処方を授りしが、北条氏が亡びて後江戸に在り、本町四丁目に住して彼の薬を商うに、大いに験ありて行わる」

と記している。

また「白石神書」の五霊膏の伝の中に

増田友嘉、小田原に在し時も、商売のことを計り、関八州の商人のレンジャクを出したり、江戸に来りし後に名主して、レンジャクの運上の事は町年寄に譲りて、江戸の家を二男にゆずる」という記事がある。レンジャクというのは連尺、連雀、連着などと書き、二片の板に縄をつないで背にかけて、荷物を背負う道具のことで、ここでは連雀商すなわち行商のことをいうのである。当時行商人の同業組合である連雀座がありその運上金を領主又は幕府に納めていた。

この記事によると増田友嘉は小田原在住の頃から五霊香本舗であるとともに、関八州の連雀座の元締であったものと思われる。

江戸初期から神田商業区の中に連雀町があって、連雀座の置かれたところとされているので、この連雀町は増田友嘉の開発になる町であろうとの説がある。

慶長年間に江戸で活躍した随筆家の三浦浄心という人は、江戸初期の文人として、業績の大きい人物である。「北条五代記」「慶長見聞集」の二大著を中心に類書の「そぞろ物語」「見聞軍抄」などの著書があるが、この人も小田原出身であった。

三浦浄心は本名を三浦五郎左衛門茂正と言って、相模武家の名族三浦氏の後裔である。永禄八年（一五六五）乙丑に小田原城下において、北条氏の属将三浦五郎左衛門茂信の嫡男として生まれた。天正五年（一五七七）十三歳の時に父を失って家を継ぎ、北条氏政に仕えた。

北条氏滅亡後は一時三浦の地に閑居していたが、後に江戸に出て盛に文筆を振って前記のような多くの著述をした。そして東叡山の慈眼大師（天海僧正）に帰依して入道、浄心と改め、山内に一庵を営んで浄心寺と名付けて住んだ。正保元年（一六四四）三月十二日八十歳で没している。

「北条五代記」は、彼が小田原北条氏に仕えていた時代に、見聞したことを中心に、北条氏及び同時代の歴史を併記した随筆で、また「慶長見聞集」は江戸に出て後に見聞した慶長年間の随筆風記録集である。

「北条五代記」には北条文化の繁栄した有様が描かれており、「慶長見聞集」には江戸市街の開発途上の姿が記述されていて、両書を比較して見ると小田原から江戸への、文化の移動がよくわかる。

北条氏の代々の侍医として知られた田村家の祖、安栖軒伝一党が江戸に移り住んだのは、北条家遺臣の徳川将軍家仕官の先頭を切ったものであった。

田村家は、京都千本に住んで、姓を田村氏と名乗ったが、安栖軒こと田村長秋号宗仙のときその名が最も著れたので、北条早雲に招かれて小田原に下り、城下に広大な邸宅を与えられて代々太守の侍医となった。

この田村氏の邸宅のあったところは、後世今に至るまで俗に安栖（斎）町、または安斎小路と呼ばれている。代々その名を「皇朝名医伝」に列ねるほどの大家であり、小田原田村家三代安栖軒長伝のとき、北条氏が滅びるとすぐ家康に招かれてその侍医となった。家康は江戸入府のとき田村長伝を従えて行き、多摩の地（日野市）に知行地を与えて、将軍家の侍医として代代法印、法部卿の位を授けて幕末に至ったのである。

このように、開発期の江戸市街に伝統の文化を植え付けたり、新しい文化を拓いたりした人々の中には、小田原北条氏文化の洗礼と訓練をうけた人が非常に多いのは注目すべき事であろう。

(七)江戸に多い小田原発祥の寺院

江戸の初期には、他地方から移転して来た寺院が多いが、その中でも小田原城下から移されたものが特別多いのが目立つ。

現在も残っているもので見れば、浅草の善照寺、寿松院、誓願寺、下谷の広徳寺で、「武江年表」巻一に

天正十八年庚寅。円満山広徳寺小田原に在しが今年北条家滅亡の後江戸に来り今の昌平橋の沼地を開いて草庵を営む。此時の住持を希叟和尚という。後神田に移り、それより後　永中今の地（下谷）に移る」

とある。右に掲げた「武江年表」の巻一をめくって小田原より江戸移転の寺院の順を見ると

「天正十九年辛卯。小田原の霊鳳山種徳寺、今年糀町へ移り、後赤坂一ツ木へ移る」

「文禄元年壬辰。田島山誓願寺、小田原より当国に呼び下し給う。慶長元年又須田町へ移され、明暦の災後浅草へ移さる。其外の寺院多く江戸へ移させ給えり」

「文禄三年甲午。小田原

の不老山寿松院、今年当地に移させられ、今は鍛冶橋の中に寺院を給わる。後年神田柳原の辺へ移り、又浅草へ移る」

「文禄四年乙未。小田原の当和山本誓寺、江戸に移し給い、日比谷の猟師町の辺に地を給はる、後に馬喰町の辺に移り、天和二年の後今の地（浅草）へ移る」

とある。各寺院とも小田原から移った後も寺地が度々移遷していることが記してあるのを見ると、新興江戸市街が発展にともない、変遷が激しかったことが知られ、時勢に対応して寺院を維持して行くことが、容易でなかったことが感ぜられる。それ故小田原から江戸へ移った寺院の数は、前掲した十ケ寺前後でなくもっと沢山あったのであろう廃亡してしまった寺院も相当あると思われる。前記の文中に「其外の寺院多く江戸へ移させ給へり」とあるように、小田原の寺院を続々江戸へ移したということは、寺院は民衆と結び付いているものだから、寺が単独で移ることは少なく、小田原の民家の移動に従って移っていったと解釈すべきであろう。

こういうことをふまえて江戸は、小田原の町と、小田原の文化を移して、町と江戸文化の基盤が作られたのであるという説も一応傾聴すべきであろう。

（おわり）

香川政治載録

中野先生受彰について

下川茂三郎

昨年度の全国地域文化功労者として、めでたく中野敬次郎先生が文部大臣賞を受彰されました。

去る十一月三十日小田原市民会館に於て、小田原市文化団体連絡協議会が主催になりその祝賀会が施行されました。

中井小田原市長さんを初め竹中教育長・社会教育課員・市文化団体の各々会員など百余名の方々が出席し

市長はじめ来賓各位のご祝辞があり、そして先生受彰およろこびのご挨拶、主催側代表の花束贈呈並びに県重要無形文化財指定の小田原ばやし保存会皆さんの

笛や太鼓の一段と音色賑やかな祝賀に初まり、県立小田原中学校（現高校）の卒業生がなつかしい学びの窓を、先生に偲ぶ思いを歌声にかえ校歌の合唱や、茶・華道界みなさんのあでやかな和装姿できれいなメロデー合唱、或は飛入りなど多彩な演技が被露され、また先生のお孫さんお二人のお嬢さんから花束贈呈をお受けになり、参加者はもとより、先生ご夫妻のお嬉びは感激ひとしほのものがあった事と思います。

中野先生には特に市文化の発展育成に積極的に取り組まれ、誠実な識見や卓抜な行動力を以て責任と協調で培われ、その使命を永年にわたってご尽力を尽された天分努力が実りをむすび報われて、栄冠をかち得られたものと心から敬意を表させて頂きます。

先生に既に昭和四十八年にも全国文化財保存功労者として文部大臣売をご受彰なされておられたとの事で

今回と二重のこのよろこびは歳月の流れの中でご精神によるものと、私どもは心から尊敬いたし模範とさせて頂きたいと思っております。

先生のご功績寄与が小田原史談会に花を添え咲せて頂きました一大慶事です。祝福の歓びは同志の誇りでもあり、会の振興を担い支えるにもその足跡が範を垂れ親しまれて、永続される会史の伝承として理想の繁栄に連なる役目を果して頂きました、誠に意義深いものがあります。

先生いつまでもご健勝で会長としてご指導あつき事を願い、末永い恩恵に浴させて下さい。

終りに四季をとうしての講演会や史跡めぐりなどには、先生のご講説が拝聴いただけますので、一人でも多くの方々にご参加賜りますようおすすめ申し上げ、会の益々の隆盛を念じてお祝いの言葉といたします。

北村透谷家譜の探究 (1)

中野敬次郎

(一)北村家の系譜資料の出所

明治の小田原が生んだ作家の北村透谷については家は小田原の藩医であったことは知られているが、祖先が代々医師であった家系のことについては詳しく書かれたものがなく、恐らく調査もされてこなかったと思うので、私のこの稿では、祖先のことを中心として家系を詳述し、併せて先祖代々の医師について記録して検討を加えたいと思う。

透谷の祖先の家は相模国足柄下郡前川村、今の小田原市前川にあった。

現在国道一号線に沿うた前川の字町谷（まちや）というところの前川六〇七番地にある旧家で農業の北村竜一郎氏の宅がその本家である。

町谷というところは昔は町屋（新編相模風土記）と記し東海道の大磯、小田原の二宿の合ノ宿である押切宿の中心街であったところである。今も町谷の集落には家が一八〇軒あまりあって、北村を名乗る家が一九軒もある。恐らく北村一族はこの地域の草分けで竜一氏宅が総本家であるとも、総本家の別家だともいう。先づ研究の対照になるのは北村家の墓地である。

この墓地は竜一郎家の裏手百メートル許りへだてた畑地にあって、その墓には北村家と同家以外の地区諸家の墓地でもある。

次に、そこより相当西の方に前川三八三番にあたるが、菩提寺の長泉寺がある

長泉寺は臨済宗建長寺末の古寺で開山の休庵は建長寺の開山大覚禅師の十八世の法孫で、永正十二年（一五一五）の建立である。

また前記墓地の前方に長泉寺末の天陽山清竜庵という寺があったが、明治初年に廃寺となって檀家は本寺の長泉寺に吸収されたけれども、清竜庵墓地はそのまま現地に残されて、長泉寺の管理となったものである

北村透谷の祖先と家系の調査の対照となるのは大体において、右に述べた北村竜一郎家と旧菩提寺の清竜庵の墓地と、現菩提寺の長泉寺の三所にしぼられることになるが、先づ現菩提寺の長泉寺調査から初めることとする。そして先づ同寺の過去帳を見ることにする

長泉寺は本寺の清竜庵が廃寺になって、庵の檀家を吸収したものであるから、北村家関係の古い記録や位牌などは所蔵してないが、北村家のかつて有していた古い記録や清竜庵にあった古い記録とを参照することによって作成されたと思われる北村家の鬼簿がこの過去帳に一括して記されてあるので、その全文を次に記して見よう。

高林院祥柳恵静上座
文久三年五月十五日
源兵衛コト
独翁性憐信士
寛文三年四月十五日

鎮守遊道信士
寛政十一年二月十二日　宗左ヱ門忰
白意紹雲信士
寛延三年六月二十七日　宗左ヱ門コト
玉雄童子
文化五年二月二十八日　玄快忰
徳因寿性信女
天明四年十月十日　玄塊母
法謡院妙絃大姉
文政六年二月二十一日　玄塊娘
春顔貞夢大姉
寛政六年二月二日　玄塊娘
凍心院医山妙器居士
天保二年十二月八日　玄快忰玄碩コト
保室智祐信女
寛政三年四月十七日　玄塊家内
智彭童女
天保八年五月一日　源兵衛娘
実叢斉海翁円空庵主
寛政十二年四月十七日　玄塊コト
権孝院慣応義順居士
天保九年十月二十一日　見順コト
大通福岩智勝大姉
天保十一年六月三日　玄快妻
縁応院随法玄器居士
天保十二年一月十七日　久太郎父コト
恵光童女
天保十四年七月十七日　源兵衛娘
真如涙月信士
明和二年八月二十四日
実如貞叶大姉
安永六年十月二十六日

以上が長泉寺過去帳の北村家の全文であるが、最後に記した真如涙月信士と実如貞吃大姉の二人分を除いては、諡号と没年月の下にみな俗名か俗縁かを記しているから、北村家の系譜の割出しに大いに役立つものであった。

さて次に北村家を訪ねると、同家にも祖先の法名を並べて記した立派な位牌が二個あって、「祖先代々」と刻した下に次のように記してある。

独翁性憐信士
寛文三卯年四月十五日
白意紹雲信士
寛延三卯年六月二十七日
真如涙月信女
明和二酉年八月二十四日
恵光童女
明和六丑年七月二十六日
徳因寿性信女
天明四辰年十月十二日
鎮守遊道信士
寛政午年二月十三日
法謡院妙絃信女
文政六未二月二十一日
智彭童女
天保八酉年五月一日
慣応義順上座
天保九戌年十月二十一日
高岳院祥林恵静上座
文久二亥年五月十三日
瑞岩院一峰恵心大姉
（筆者註、恵心の二字朱書）

以上記したのが一枚で、もう一枚の位牌は次の通り記してある。

実如真吽信士
安永五酉年十月二十六日
保室智祐信女
寛政三亥年四月十七日
春顔貞夢信女
寛政六寅年二月二日
海翁円空庵主
寛政十二卯年四月十七日
玉雄童子
文化五辰年二月二十八日
凍心院医山妙器居士
天保二卯年十二月八日
大通院福岩智勝大姉
天保十一年子年六月三日
縁応院随法玄器居士
天保十二丑年閏正月七日

この二枚の位牌は同時に作られたものであるが、北村源兵衛（高岳院・文久二年没）の妻すみの法号（瑞岩院恵心）がまだ朱書になっていて、没年も記入していないところを見ると、彼女の生前中に作られたものですみの夫の死亡直後か明治の初年に作られた位牌だろう。

さて、次に北村家の墓地の調査であるが、先づ北村家の墓石の中に、同家第二代医師玄快が建てた一族の法号列記の供養墓碑が一個あるのを注目しよう。

それを見ると、表面に祖先の諡号を列記し、両側にこれらの人々の没年月を彫している。

（表面）
独翁性憐信士
白意紹雲信士
真如涙月信女
実如貞吽信女
海翁円空庵主
保室智祐信女
徳因寿継信女
春顔貞夢大姉
随法玄喜居士
福岩智勝大姉
遊道禅定門
玉雄童子
智彭童女

（側面）
独翁　寛文三年四月十五日
白意　寛延三年六月二十七日
真如　明和二年八月二十四日
実如　安永六年十月二十六日
海翁　寛政十二年四月十七日
保室　寛政三年四月十七日
徳因　天明四年十月十二日
春顔　寛政六年二月二日
遊道　寛政十午年二月十二日
玉雄　文化五辰年二月二十八日
智彭　天保八酉年五月四日
小田原家中　北村玄快建之

以上が墓碑に彫されてある全文であるが、没年彫記の中には「随法玄喜居士」と「福岩智勝大姉」との分がない。しかしこれは不思議ではなく「随法」はこの墓石の建立者玄快であり、「福岩」はその妻であって夫妻で死後の諡号すでに作って墓石に刻しているが、実は両人ともまだ生存中であったからである。

建墓の年月は彫記しておらぬが、智彭童女（源兵衛の娘）の歿年の天保八年五月四日を記しているから建碑はその以後であること明白であり、また玄快は天保十二年一月十七日妻の「福岩」は天保十一年六月三日に死亡しているので、結局天保八年（一八三七）五月以降、天保十一年六月までの間に建てられものであるところがよく検討して見ると玄快の孫の見順（権孝院慣応義順居士）が天保九年十月二十一日に没しているのに、その名の見えないところからすると、見順の生存中の建碑ということになるわけで、天保八年五月以降天保九年十月以前の建碑となるわけで、恐らく天保九年（一八三八）の春に作られたものと推定する。

医家北村家の系譜が従来不明であるので、これを作成しようと思うのであるがこの墓碑は最も確実で古い資料であるが、建立の年が今まで明かでなかったが、以上のような推定によって略々明確になったのは幸いである。

以上の長泉寺去過帳、北村家所蔵の先祖位牌、清竜庵墓石の三者の資料について見ると、天保九年春建立したと思われる旧清竜庵墓碑がもっとも古く確実で、それについで長泉寺過去帳が出来たが、これは旧清竜庵去過帳（今は失われて無い）や墓石によって整理せられ、そして最後に明治十年前後の頃北村家位牌ができたものであろうと思われるが、過去帳と位牌とに一二点の諡号と没年月に相異が見られるが、これは転写のときの誤りであろうと思う。この三者をもとにして誤りを定しつつ北村家の系譜を作り、透谷誕生に至るまでの北村家の人々の経歴と医家としての業績を明かにしたいと思う。

こうした研究の最中に、今まで一般に知られていなかった在家医師の大物玄塊（玄快にあらず）という人物を発見したのは非常な喜びであった。（つづく）

鉢形城訪問史跡めぐり

香川政治

恒例の小田原文化団体連絡協議会主催の文化祭の催し物酣の折、偶々埼玉県寄居町の有志により結成されている北条氏邦の遺徳を偲ぶ三鱗会より十一月三日鉢形城祭が行なわれるので史談会も参加して欲しいとの招請があり、折角の招きでもあり、これと並行して晩秋の奥秩父路周辺の史跡を探訪することを理事会に計り決定直ちにプランを樹てたところ多数の賛同を得て十一月三日文化の日午前七時バス一台一行四四名小田原駅前出発大井松田インターより東名高速道を東進途中港北パーキングエリヤ小憩、東京インターより環状八号線を経て、休日の関係で幸にも交通渋滞もなくスムースに都内を抜け予定した時間に練馬インター八時五十分通過関越自動車道を快晴な秋空の下を快適なドライヴ一気に花園インターへ、ここより国道一四〇号線に入り寄居町に向う。鉢形城趾に九時五十分着、三鱗会の役員に迎えられ休憩所に入り小憩の後、御殿下曲輪跡に建立されている万霊塔前で、落城当時の戦死者の慰霊祭に参列、祭典終った後三鱗会の役員の案内で城跡を一巡、当時の遺構その他地形等詳細な説明を聞きながら休憩所に戻り中食（握り飯）の接待を受ける。

握り飯について此処では鉢形城祭りの当日の中食は皆落城の哀しい往時を偲んで御馳走を作らず握り飯と漬物だけで済ます慣例である故、弁当は持参しないで欲しいとのことであったので遠慮なく接待に預った。

中食後寄居町の東方、車で十分程度の所、大里郡川本に畠山重忠の館跡を訪れ館跡に建てられている畠山一家の墓（五輪塔）に詣で再び寄居町に戻り北条氏邦夫妻の菩提寺正龍寺を訪れる。墓は養父母藤田康邦、養母西福御前夫妻と北条氏邦、大福御前夫妻と横一列に四基が立派な廟堂に祀られている。廟堂に就いて案内の方に尋ねたところ町当局と県当局と連携をとり、永い歳月風雨に晒しておくと墓石が自然に剝落損耗する故、文化財の遺産保持の為建立したとのこと。僅か人口三万有余人の小いさな町でありながら文化遺産保護の関心度の高揚さには頭の下がる感一入!!

墓に詣で続いて本堂裏の庭園拝観、池の中央にあたる小高い山裾に「玉垂れの楓」（天然記念物指定）、名称のとおり美事な枝振りが池の面に覆いかぶり壮観樹齢数百年とか、惜しいことに老木故台風にて主幹が上部で折れ現在は少し淋しい。然し珍らしい楓で一見しだれ桜のように枝が垂れ下がっている。

本堂内の宝物拝観後町の中心街中央公民館前の駐車場にて車を降り約三十分間自由行動、丁度この日は鉢形城祭りと寄居町の冬祭り（宗像神社）とが行なわれて武者行列、屋台の渡御等祭り気分の漲る町の中へ祭り見物に、商店街を数台の三階造りの屋台がそれぞれに飾り付をして屋台囃子も賑やかに若衆に引かれて行く勇壮な祭り気分三三五五満喫、案内の方に別れを告げ今日の宿泊地長瀞に車を進め十六時三十分ホテル長生館に着く。

翌朝ホテルを八時出発三峰山に向う。途中道筋にある秩父神社に参拝希望者多数、ここに参拝することにした。神社は一四〇号線沿い秩父市の中心部に在り、玄関横付といった状態で時間のロスもなく、境内に一歩進むと正面に悠遠且典雅な神秘に包まれた本殿に接す。本殿には正面を除く三方の廂の下の壁面に巧緻な技法を施した彫刻の額、特に本殿正面向って右側壁面には左甚五郎作「つなぎの龍」「子育ての虎」の繋捌きの見事さは目を見晴るばかり一同歓喜、約三十分聖域を拝観、九時神社前出発市内を抜け一四〇号線を標高千百㍍の三峰山に車は進む。大滝村の村落を過ぎ九十九折りの急坂を登りながら両側の山並が一面に紅葉大自然の一大パノラマを展開している奥秩父晩秋の景観を観賞、又眼下には秩父宮妃殿下が命名されたと云う秩父湖が満々と水を湛える湖面を眼下に見ながら車は早くも三峰神社下の駐車場に十時到着神社まで徒歩五～六分、一行参拝後社殿横広場で中野先生から縁起その他に就いて説明を聞く

社殿は壮厳な建築で往時修験者の道場として栄えたとのこと。いかにも周囲の環境より推察してもそれに相応しい雰囲気を醸している。約一時間境内を各自自由に見学十一時出発元の道を自然美を観賞しながら秩父市から二九九号線を走行正丸峠に向う。正丸峠頂上の奥村ドライブインに十二時五分着中食、十三時出発最後の見学地、有名な高麗村（現在日高町）今から千二百六十七年前（霊亀二年（七一六）奈良時代甲、駿関東地方七ヶ所に分散居住の帰化した高麗人を一ヶ所に集結して高麗郷を設けた地方!!この地に建立されている聖天院に十三時五十分着、車を降り参道を進むと先づ正面に壮厳な唐様式の山門が目を引く。山門をくぐり境内に歩を進め本堂前で中野先生から高麗村の生い立ち、寺の縁起等の話があり、その後寺内を見学、山門の右様に五個の砂岩を重ねた多宝塔（高麗王の墓）に詣で、続いて徒歩五～六分の処に聖天院から東方に在る高麗神社に参拝、社殿の後方に十七世紀に建築された高麗家の住宅（重文）を見学十六時帰路につく。丁度夕刻の交通ラッシュの時間帯で飯能、福生（フッサ）、入間、昭島の各市を経て横田のドライヴインで小憩、八王子市内は車の渋滞特に悪く遅々として進まず、橋本で十六号線と別れ一二九号線を厚木市に、ここより厚木バイパス、漸く順調な走行予定より約一時間遅れ小田原駅前十九時三十分到着、二日間天候に恵まれ予定のコースを恙なく完了一同元気に解散

見学地の概要を当目のプリント及その他の資料で参考までに記してみよう。

。期日　昭和五十八年十一月三～四両日（一泊二日）

。出発　十一月三日午前七時駅前バス一台

。参加者四四名（会費二万円）

。日程（第一日）小田原―寄居鉢形城祭参加―鉢形城趾―畠山重忠館趾―正龍寺、北条氏邦夫妻墓―長瀞一七・〇〇（宿泊）

（第二日）

長瀞―秩父神社―三峰神社（頂上までバス）正丸峠（中食）―日高町（高麗人遺跡）―飯能―八王子―厚木―アツギバイパス―一六・三〇

小田原

(一)鉢形城と北条氏

鉢形城は戦国時代の関東の名城である。平の将門の乱の時、武蔵国司源経基が防御の砦を築いたのにはじまり、室町時代後半には山ノ内上杉の拠点として重きをなした。永禄年間に北条氏康の三男北条氏邦の居住となってから整備拡大されて大城となった。

天正十八年（一五九〇）小田原戦役のとき、前田利

家、上杉景勝、真田昌幸等五万の大軍に囲まれ、城兵三千五百人で防戦一ヶ月で六月十四日開城した。

城は天険のの要害とも言うべき広大な平城で、総面積十五ヘクタールに及び、本丸、二ノ丸、三ノ丸のある内曲輪と食糧蔵のあった外曲輪とに分れて、遺構よく残っている。国の史跡指定である。

㈡畠山重忠の墓と万福寺

秩父鉄道武川駅の南方大里郡川本町の万福寺（真言宗）は畠山重忠の菩提寺でその附近一帯が畠山で畠山氏が起った所である。

畠山庄司重能と三浦大介義明の娘との間に長寛二年（一一六四）この庄内畠山館に重忠は誕生した。畠山館趾（県重文）と重忠の墓（五輪塔・県史跡）がある（四基とも県史跡指定）

㈢北条氏邦夫妻の墓のある正龍寺（寄井町）

曹洞宗高根山藤原院と号す。藤田康邦の開山で、乾翁瑞元和尚の開基と言われているが、それ以前藤田家の祖藤田五郎正行の代に既に創立されたと伝えられていることから、康邦の時代に現在地に移されたものと思われ、本堂伽藍等は康邦の寄進で天文二二年（一五五三）の造営とされている

境内には藤田康邦夫妻と北条氏邦夫妻の墓がある。

北条氏邦の妻大福御前は藤田康邦の娘で、鉢形落城の寸前に近臣、腰元等に守られ城を抜け出し、荒川を渡り菩提寺である正龍寺に向うが、包囲軍の警戒厳しく容易に辿りつくことができず、川岸の湿地帯に身を潜めていた。現在でもここを「女沢」と呼ばれているやっとの思いで正龍寺に辿り着いた大福御前は夫氏邦に会うが、氏邦は入道して栄清と号し前田家に預りの身となって前田氏帰国とともに加賀国金沢に旅立った為、境内に堂宇を建て宗栄尼となり貞操を守り、千日普門品千部読経を発願し、文禄二年（一五九三）五月十日満願の日沐浴して仏前に向い傍に人なきを見て自刃して果てたと言う。

㈣長瀞

秩父郡長瀞町、名勝長瀞は荒川の岩畳が国指定の名勝、天然記念物で、秩父鉄道親鼻駅から高砂橋までの荒川筋四五ヘクタールの河川敷と沿岸の民有地一二ヘクタールを合せた広大の地域が指定地である。

長瀞を構成する岩石は長瀞式結晶片岩と言われ、各種の片岩類が地表に現わていて地質学の宝庫と言われる。

㈤秩父神社（秩父市番場町）

秩父神社は悠遠且典雅な神秘に包まれる聖域、神社は秩父市の中央に鎮座し秩父三社巡りの三峰、宝登山両神社の中間にあって、古くから秩父総社延喜式内社関東の古社として知られ、創立は崇神天皇の御代秩父国造の始祖知知夫彦命が命の祖神八意思金命を奉斎したと記録されている。

現在の社殿は戦国末期に兵火に炎上したのを徳川家康が造営したもので当時の棟札が社宝として保存されている。

祭神　八意思金命
　　知知夫彦命
　　天之御中主神
　　秩父宮雍仁親王

社殿　天正二十年（一五九二）本殿、幣殿、拝殿、連繋三棟合殿権現造、昭和四十一年台風により損傷、解体復元

祭典　例大祭　十二月三日（国指定無形文化財）神輿の御神幸は夕刻より始まり儀式壮厳善美を尽す。屋台笠鉾の華麗、遠近の参拝者雑踏す。京都の祇園祭、飛騨の高山祭と共に日本三大山車祭の一つと呼ばれている。

㈥三峰神社（秩父郡大滝村）

三峰神社は長瀞の西方約二五キロ、秩父の町の西を流れる荒川を遡ると大滝村三峰山に鎮座す。三峰とは雲取、白岩、妙法の三山を三峰と云われ、修験道場として栄えた所であったが神仏分離で神社となった。

本殿は標高千余㍍の所にあって寛文六年（一六六）に造られた春日造りで、拝殿は寛政一二年（一八〇〇）に造られた権現造りで何れも格調の高い建築である。

祭神
┌伊邪那岐命
├伊邪那美命
└大山祇命

例大祭が四月八日行なわれる。

境内には昔仁王門であった随神門は高せ一六㍍余の堂々たる建築で、寛政四年（一四六三）建立、この門の左上の屋根に三根山を開いたと伝えられる日本武尊の銅像が昭和四十五年（一九二九）建立、秩父宮記念館や構中の人達のための二四〇畳敷の大広間のある大宿坊などがある。

㈦古代高麗人の居住地日高町

①高麗郡の歴史

我国六大史書の一つである続日本紀巻ノ七に元正天皇霊亀二年（七一六）奈良時代五月の条に

駿河、甲斐、相模、上総下総、常陸、下野の七ヶ国の高麗人一七九九人を以て武蔵国（埼玉県）に移し高麗郡を置くとあり。これによって当時甲駿関東の各地に散在していた高麗人を武蔵ノ国に集め移して高麗郡を置いたことが知られる。

高麗は高句麗とも呼ばれ西洋紀元前中国の北部松花江の上流扶余の地方に興り北支から朝鮮半島まで勢力を張り、平壌を都として中国の文化を取り入れた強大な国であったが、建国七〇〇年天智天皇の七年（六六八）唐のために亡ぼされたその時難を避け多くの王族や遺臣などが海を渡って我国に亡命し、帰化して関東の各地に居住していたのがこれらの人々で、武蔵国の一隅を安全の地として与えられたのである。

高麗（高句麗）は、その滅亡の後に建国した新羅のあとをうけて朝鮮を永く統治した高麗（コウライ）とは文字が同じであるが、年代の違いも著しく読方も異り全く別の国である。

②高麗人安住の地高麗郡

当時の郡の範囲は判然としないが、その中心となったのは聖天院のある旧高麗村の周辺とされている。この地は古くから高麗郷と呼ばれ、三方は秩父山系に囲まれ、東は武蔵野に連なる農村部で中央を西武の山岳地帯に源を発する高麗川の清流が蛇行東流し山水の美に恵まれた平和郷である。

高麗郷は設置されてから一二六〇年余、かつて関東文化の源泉といわれ広く知られてきたが明治二十九年（一八九六）入間郡となり昭和三十年（一九五五）高麗村も隣村と合併して日高町となった。

㈧高麗山聖天院の由来

㈠郡の首長高麗若光

高麗郡を置いたとき初めて郡の長を命ぜられたのは高麗若光である。若光も帰化した一人で続日本紀文武天皇太宝三年（七〇三）の条に、従五位下高麗若光に王姓を賜うとあり、郡長就任前既に叙位され、更に王姓を贈られたのは若光が高麗の王族であり勝れた人であったので、朝廷から特に優遇されたものと思われる

王若光は、郡民を励まし祖国の技術をもって荒野を拓き産業を興して民生が安定し大いに治績を収め、郡民哀惜の裡に波瀾に富んだ生涯を終えた。王の歿後王の持念僧勝楽は王の冥福を祈り菩提を弔うため一寺を創草し、半途にして歿した。その弟子聖雲（王の弟三子）は弘仁（王の孫）と共に勝楽の遺志を継ぎ不年にして建立、父若光が故国より斉来した崇信仏聖天尊を本尊とした。聖天院勝楽寺の称号の由来である。

聖天院の創建は高麗郡が置かれてより約三十五年後に当り高麗王若光、王持念僧勝楽、聖雲をはじめとする一族の霊は千二百余年間今もなお当山にて回向され続けている。

王の墓は境内山門の東池畔老樹閑静の境に住り、五箇の砂岩を重ねた多宝塔ですこぶる古色を帯びているこの塔は朝鮮様式と言われる素朴なもので鎌倉期以前の建立と伝えられている。（町指定文化財）

(ロ)建造物

本堂　寛永年間（一六九〇年代）再建現在に至る。間口一三間奥行九間。本尊に不動明王を祀り、大日如来、聖観音、地蔵菩薩、愛染明王、日光月光両菩薩を配祀、堂内左手に若光守護仏聖天尊が祀られている。

。山門　間口四間四尺八寸奥行三間二層楼閣瓦葺総欅木造、天保初年～三年に完成。大きさ建築様式共に近郷稀にみる優美さと重厚さを備えた建造物である。楼閣二階の山号額は江戸の住人中村入道景蓮の書、天上画は龍、鳳凰共に江戸の画師南沢による。門の左右に風神、雷神を祀り、階上に大日如来、七観音、十六羅漢が配祀されていて実に壮厳な山門である。

その他寺宝等多数ある。

(ハ)高麗神社

高麗神社は高麗王（若光）の遺徳を敬慕し神に祀ったと云う。聖天院から東方徒歩五～六分の所に在り高麗人の古来よりの氏神で若光の子孫が代々高麗王を名乗って宮司を勤め現在の宮司は五十九代目であるという。

同家に古くから伝わる系図の前文に神社創建の由来と併せて次のことが記されている。

「天平勝宝三年辛卯の年（七五一）僧勝楽寂す。弘仁その弟子聖雲と同じく遺骨を納め一宇を創草す。勝楽寺という。聖雲は若光の第三子なり」

境内に一七世紀に建築された高麗家の住宅（重文）がある。五十八年十一月記

松本孝作さんの思いで

米神　渡辺弥太郎

略歴

明治三九年十月十七日生

大正七年　米神産業組合設立と共に事務員となる

大正十二年　関東大震災の際みかん共同販売の重要性を強調。此の設立に挺身成果を収む

昭和二年より昭和二十一年に至る間

来神産業組合理事　組合長

片浦村農会長

神奈川県連合会理事

神奈川県農業会　常任監事

片浦農業副会長

戦時中

片浦翼賛壮年団長

足柄下郡副団長

本部長

昭和二十一年　公職追放令と共に十二月三十一日限一切の公職追放となる

昭和二十六年　公職追放令解除

昭和二十七年　片浦村助役に就任

昭和二十九年　小田原合併となり初代支所長

昭和三十四年　定年により退職

昭和三十五年　神奈川県柑友会設立され会長となり昭和四十九年解散に至る迄本職に留まる

この間郷土歴史に深い関心を持ち、地元片浦に史談会を組織し、会長となる。

なお趣味として琵琶を愛好し皆伝を取得

―昭和五十四年　松本孝作のみかん随想録より―

松本孝作氏は昭和四十六年二月小田原史談会片浦支部を結成初代支部長となり、昭和五十七年七月迄約十一年間支部長、会長（途中小田原史談会片浦支部を片浦史談会と改める）をつとめ後も名誉会長として活躍され本年一月二十八日八十九歳の長い生涯を閉じたのであります。

前記の略歴に見られる様に、故松本孝作氏は其の生涯を蜜柑の栽培と発展に務めたのであります。

又老後を歴史の研究、琵琶の演奏、読書、畑仕事と、ゆう〳〵自適の生活をしていたのです。

以上に見られる様に故松本氏は剛柔両方の性格があり、蜜柑栽培販売等には剛であり又、歴史の研究、琵琶演奏等については柔であった様です。

然し自分で言い出した事はどこまでもつらぬく、例へば「すけた畑」＝佐殿畑＝の史跡指定についても小田原史談会々長の中野先生に何度も何度もお願いを繰返して居たとの事、先日の葬儀の折先生は苦笑されて居りました。その様な性格が善悪は別として産業組合農業会、翼賛会、そして片浦史談会の会長を永い間勤め得たものと思います。

晩年御不自由なお軀にもめげづ奥さんと息子さんやお孫さんの運転する車でいつも畑へ行ってました。

家などで時々会うと「弥っさんもう軀が言う事をきかない、足が駄目だ」等こぼして居ました。私が「余り無理をしない様に」と言うと「まだ大丈夫だ」といつも言ってたけ。

畑に行くにもお医者さんに行くにもいつも奥さんと御一しょで御夫婦の仲の良さは天下第一級だったのではあるまいか。

松本さんは家でも、松一さんやお孫さん、そしてお

故額田喜代春氏を偲んで

下川茂三郎

去る二月十八日の理事会の席で、二月六日午後一時頃満八十三歳十ヶ月のご高令で不帰の客として雲上の旅立ちをされたとのご報告に、痛惜と追慕の情にたえませんでした。

諸先輩の方々をさしおいて僭越のそしりをまぬがれることは出来ませんが、史談会理事今は亡き額田喜代春氏を偲び、本誌をおかりして長い歳月に於て理事としてご尽力頂いたご業績をたたえ謹んでお悔み申し上げたいと存じます。

今年は近年にない降雪でとけやらぬまの又雪と寒暖のはげしい気候が、幽明界を異にしてしまわれた事で

ひこさん等より「おじいさんおじいさん」と親しまれて居りました。

一見固物的な松本さんも一と度家に帰えれば家中の皆んなから親しまれる好々爺だったのです。

そんな松本さんはもう居ません。

呼んでも帰っては来ません吾が史談会の生みの親であり、育ての親である松本さん、どうか史談会をいつまでも見守っていて下さい。お家の方々も立派に生きて行くでしょう。

遠い空の上からお守り下さい。

ではなき松本孝作さんの御冥福を祈りつゝ筆を置きます。

昭和五十九年二月廿三日記

しょう。奇妙なことに明治三十三年子年のお生れで子年にご他界遊ばされるとは何かご人徳を偲ばれる思いが致します。

氏の過去をかえり見ますと史談会創立当時から史談の編集・監査・副会長・理事など歴任されました。

しかも家業のかたわら国鉄職員を本業としてご裕福なご家庭をお築きになり、特に永年抜擢の要職に当られその国鉄分野の執筆に着目され、職業柄の職見の洞察力り緻密な頭脳をもって文字通り述作に没我専念された事と思い、誠にもって真似る事を許さない神韻との信念を育まれたと推察いたします。

来年の史談会三十周年記念事業にもご参加頂けたのにと心残りです。

会報にご貢献頂いた学徳を偲んで見ますと、現在発行部数百拾五号誌の内驚くべきことに三十九誌・三十九題・字数約十二万字という膨大な活字をお残しになり、中でも八三号は個人の「特集号」としての御事績があり、また、九五号から百十一号に至る拾誌には五拾項目にわたり別筆されたりして、優秀な文学者の学識を備え、会員随一の寄稿者として史誌の中に生涯の理想を埋め尽され、誠に貴重な礎として軌跡されました。そして会友達にとって何に勝るものなしの数々の薫陶ご教訓を語り継がれました。

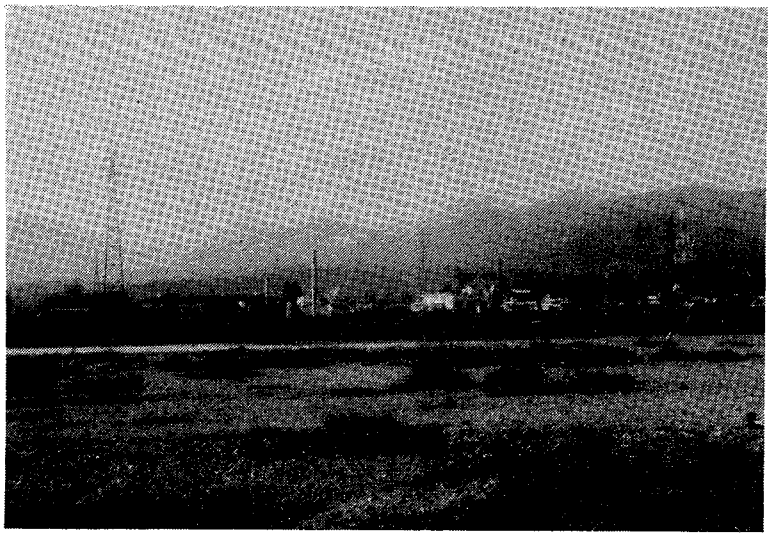
この数多くの会報の筆をお残し頂けたのも、一重にご家族一同の陰陽に相扶け相励しの効のご努力があればこそでしょう。

先日史談会事務局のお話によりますと、お母さん共々にて弔祭の御礼のご挨拶にお出向き頂きましたそうで、又ご厚志まで添て頂戴いたしたとのこと、本誌にて失礼ですがご家族の皆様に深く御礼申し上げます。

どうかご子息様にも亡きお父様の崇高なるご意志をお継ぎ頂きまして、会の促進にご尽力下されますようお願い申し上げます。

生前のご人徳とはすの花の人となられましたが、いつまでも尊敬追慕し誠に哀惜の情は尽きません。

此処に会員の一人として安らかなご冥福を念ごろにお祈り申し上げます。

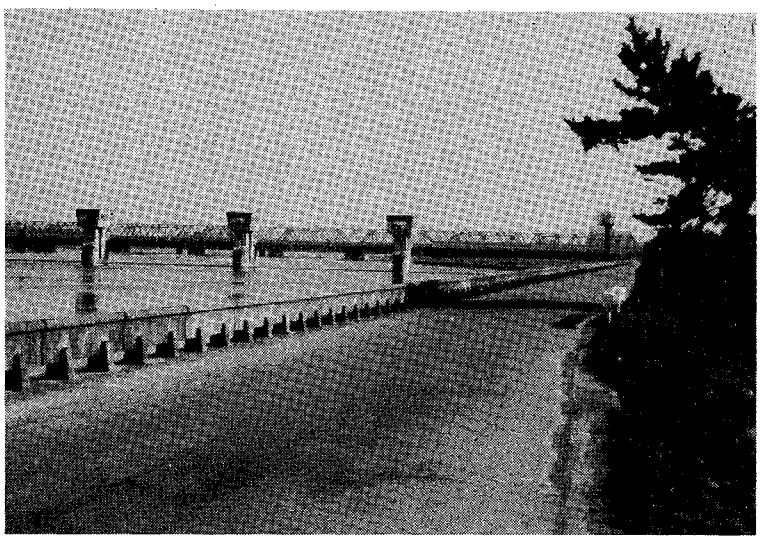


古里望景

星野幸一

相模灘の潮騒は遠く
箱根連山や
　丹沢の山並遙か
酒匂川と
　久野川にはさまれた
この村は私たちの古里

酒匂川西岸を一望すれば
北から南へ用水の
　ゆきわたる田圃
これといった
　郷土色もなく
村の歴史はつくられた



↑飯泉橋右岸からみた酒匂川風景（取水堰と下流にみえるは新幹線、東海道線の鉄橋）

←酒匂川左岸飯泉橋付近より箱根連山を望む

明治二十二年四月
　井細田村は
多古村今井村と
　合併して二川村
明治四十一年四月
　二川村は
芦子村久野村富水村
　と合併して足柄村
三十年の後
昭和十五年は
　皇紀二千六百年
足柄村は二月
　町制施行で足柄町
十二月小田原町と
　対等合併の小田原市
往還は商店が並んできた
更に三十年の後
昭和四十六年十月
井細田は住居表示の
　変更で扇町
田圃は工場や住宅で埋り
国道二百五十五線が
　開通した
三十年という数字が
村や町をつくりかえ
人々はこの町を
古里として生きてきた
　昭和五十八年十一月

編集部から

最後に編集部として原稿が集まらないので困って居ります、是非原稿を御送り下さいます様お願い申し上げます。

杉崎